

16世紀以来、反対に、父と母の両側にプロテスタントの家族的起源を持っていたからです。それは、家族によって伝えられ、各世代により再確認されてきたプロテスタンティズムが、現在、その選択がより個人的で、家族的ではないものへと代わりつつあることを、意味します。フランス・プロテスタンティズムにおける、歴史と記憶の重要性を考えてみれば（それは、第一部で述べたことですが）、この新信徒獲得における変化が、プロテスタンティズムの性格に影響を及ぼすことも有り得るでしょう。もし、こういう言い方が許されるとするならば、そのようなプロテスタンティズムは、敬虔や宗教的文化において、より「歴史的」でなく、伝統的でないものと言えるでしょう。長い伝統を持たない国のプロテスタンティズムに、次第に似つつあるのです。

この他に、現在顕著であるもう一つの特徴があり、それが、以上の変化を助長しています。ただし、それは、統計的な手法（数字）によって、実態を把握できるようなものではありません。私が用いた情報は、重責に就き、基本的な状況を把握しやすい位置にある、信徒や牧師との対談によるものです。その特徴とは、改革派教会の牧師と要職（cadres）が、次第に、カトリックからの改宗者によって占められつつある、ということです。その家族が、元来カトリックではあったが、既にキリスト教信仰から離れていた、ということも、しばしばあります。

この現象は喜ばしいものではありませんが、フランス・プロテスタンティズムの精神性を変化させる恐れもあります。フランス・プロテスタンティズムは、歴史的に形成された「精神性（mentalité）」の存在によって、非常に広く、自己を定義してきました。その精神性とは、長期の抵抗によるところの頑固さ、フランスのある特別な伝統を身に帯びていることの誇り、信仰の表現における控えめな態度、信仰の私的・個人的な面をより好むこと、プロテスタンティズム内部の多様性と他宗教に関する寛容、などです。これら全ては、フランスの「プロテスタント的人間 homme protestant」（レオナルドやジャンヌ・ギャリソンの著作を参照して下さい）の内容を定義してきましたし、今もそうです。そしてその精神性は、フラン

スのプロテスタントに、フランスの社会と文化における、特別な公的地位と承認を保障していました。しかし、同じような経験や記憶を持たない信徒が現れることにより、プロテスタンティズムは、フランス社会の全体の中での位置づけを変えつつあるように思われます。恐らく、社会において少数派であり歴史の浅い、他のプロテスタンティズム諸派に、より近づいていくことになるでしょう。フランスのプロテスタンティズムは、少数派ではありましたが、多数包括主義的（これに関しては、前に述べました）でした。しかし、信仰の積極的表明を重視するメンバーが加わるにつれ、プロテスタンティズム自体も、より告白的になる傾向にあります。

以上の点について、フランスにおける、今日のプロテスタンティズムの刷新と発展は、カトリシズム出身の信徒の流入に多くを負っている、と結論できるでしょう。しかし、それはカトリック教会との論争を意味するものではありません。プロテスタンティズムは、フランスでの歴史において、初めて、カトリック教会と、自由、かつ直接的な競争関係に入りました。そしてそれは、少なくとも公けには、両教派間の関係に否定的な結果をもたらしてはなりません。この関係の長期的な結果の一つは、フランスにおいて、プロテスタンティズムが、次第に、自己をカトリシズムに代わりうるキリスト教である、と見なすようになる、ということです。ただし、かつて両教派の間を支配していた攻撃性は、そこには見られないのです。

B. 教会の制度とメッセージの観点

カトリックが多数派である社会においてどのように少数派であるべきか、という第2部全体の問題に対し、ここでは、フランス・プロテスタンティズムが採用すべき公的戦略について考えてみましょう。その場合、問題となるのは、各教派よりも、プロテスタント連盟全体の戦略です。この連盟は、あらゆるプロテスタント教会を再結集しており、それにより、一つの公的な立場を表明することが可能です。そして、フランス国家が関係を維持しているのは、各教派とではなく、ただ連盟に対してのみなのです。

連盟の戦略は、先述のカトリック教会との良好